西垣文庫
文庫10
8618

勸善懲惡　官許錦画新聞

第廿二號

大阪第二大區十小區
東阪町六番地元泉平吏

本田平三良妻おいとなるもの、富
六十八歳おていとまめやうある性質なれ
何事の憂少る事有るも去る六月十日の
夜ヤト家出して行衛知れず平三良ハ
養子なり西阪町増田弥兵工の忰なれ
ども一戸のとき本田へ来り此妻を養ハるる者
なれバ義母を背く苦心して居るを同じ伝を泉丸
堺の濱へ身を投げ老女布と漁父見付ていろく
介抱せども其甲斐なく何方の人なるやと探索すれども
或る人大阪東阪町ハ志ろくの事有り又其おいと、出生堺
なれバ其人やもてなりやと一種志ろくせんと死せし老母の
かんざしを目證として本田へ来て尋ねし平三良ハ其かんざし
を見て是ハ我が母のかんざしなりとの咎めを堺の死人ハ
尚本田方ハ今ハ行衛志ろくなるよ置るとし
実氣有人なれ近辺の評判もよしいろく
人々不審の思ひなるとあり是新聞の一つ
尚亦いとのなりゆき若聞あバ号をへて速
報知をべし

時習舎主人述
笹木主人画

新聞局
本町四丁目
藤井時習舎

官許 錦画百事新聞

第五十一号

サアヽ
伴利のぜんざいや
大坂南下ー
難波村豆谷
弥吉の

婦おあまの
年月添ひし
若ゐ後夫ハ
中がひ後を
後ハ今宮村小日を
忘いまさ
なりと
なりと
みびみ
比美
浄瑠璃の種と
焼けと一月十
文げつ
格子
ふきさ
ゆやーと
弥吉
切ま
なぜ
行ふ
おあまを
ゆく
門ふ
色ひ
三年
婦ふ
ふ
ふ

官許
新聞写真画報
第十三号
張彫堂
下女
おこん
花の源花のそのさんろうさてもさてもさても

錦画百事新聞

第壱拾二号

大阪心斎橋西一百事新聞局

官許

錦画百事新聞

第十九号

奥山ハ艶
踏み込む浅草
の境内廣況
其外とりハ淡さ

渡世の水茶屋ハ山の
宿駕籠徳次郎が娘
おそみ心ざしとりハ厚されど
老さき立て度の活計も芳ばしく
尚衰えるる中ハ母親脹満の難
病の床ハ卧ながらも因師ハかけべき
手だてもあく心を崇しく倖ひ
近き近經も導さ久観
音堂ゆへ且ハ祈願をあ
傍目もふた不乱の
孝心深切天ハ通ど
てや

一七日ハ及ぶの夜夢とあく〜替つとあく〜枕の上ハイ〜給ひ観世音の
御告なり明日ハあた老入到らば是則名医〜まゆて良薬を貰ひ
服ばべ〜と頃ハ夢さめ驚き拝〜翌日早て翁来り薬を乞
〜其方ハ追く全快ハ疾ふ〜りて朦朧の説とゝどおそみの孝道
天ハ通ど新も有さ一段ハ讀うを記者ぞ述べり
○門ゑ寄れ拙ハのうらたまゆれてあるも
沙路ハ仏ゝ月報　炭水

編輯人女喜吉
印刷人前田太兵衛

長谷川貞信画

官許 錦画百事新聞

第九十二号

開化萬歳續編

「ヤ修業く」 仮文字紙の法帳面。手さる人力る事ども〳〵。

世界おづむ。福人や去郎者ひる徳兵で。ロカラ名家元。

ろかぬ狩さち。えくらん金ちさと書ろ中やふ。ぢん紙。深りの角紙

おくの格ひ〳〵ゆり人民まれ。第八白をや人 三人ふびぎち ビール利ろ馬

屋炭法ろやぢん屋ちけつとうにふ風ぢ。ちまん〳〵ろ。ぢんまんて。富

まのて。おつさとまつ切ろ子をおどの姉や。軽産ひとつ出。古んぶせ甘ろ

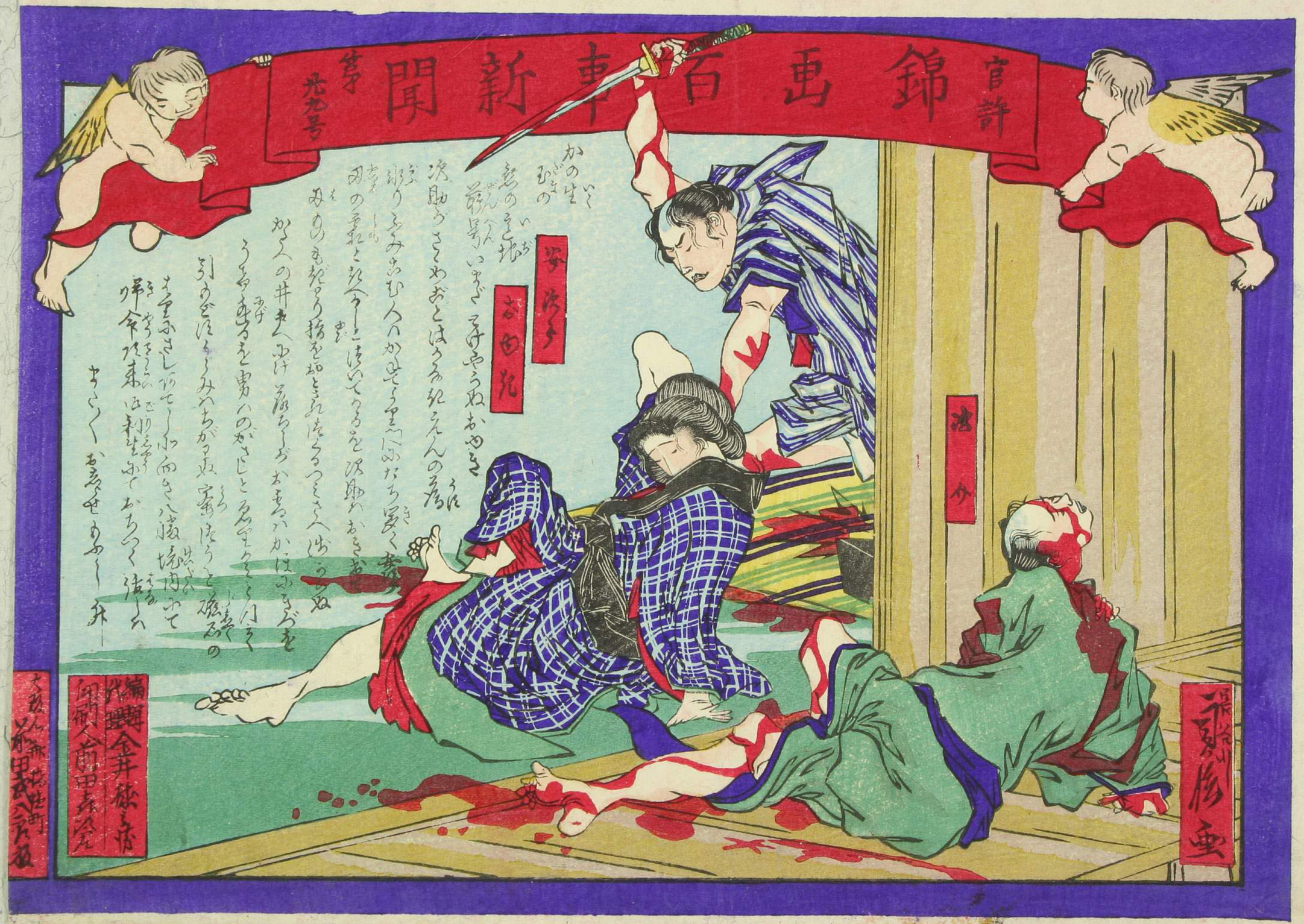
大ろふ机ろ。ちやうやくらもぐ死孤をす。ちまつをく〳〵ちまろ名姉

もぐぢやう川に浜浦も千ろ松千ぎう。ろ。芭郭富。主第も半

まもふ敷。字車ろぢたのしむ

社文の仲

編輯 金井徳兵
代理 [illegible]
印刷人 [illegible]
大阪出張務所 百事新聞局


官許
錦画百事新聞
第九号
安次郎
お田丸
池分
張月樵画
編輯 金井秋香
同人 前田春湖

奇錦亟百事新聞

第七号

豐後國岡町
在の久戸谷ふ
河村某の娘ハ
小梅ふ行と云
有て父ハ
早く世
を去り
いまだ
二十才
の母
ありが
別れ
夫ふ
操をそ
世ふ憂きを
も時折ふ
思ひ續き
くく病ひを
二人の孝女いたる内ち
妹のたけハ目を煩ひ二介の
看病小梅の手ひろ業ハ
おろろ夜も寝ぬ程にて
母ハ咽喉を謂ー雪ハ喰いたいと云を耳
小梅いろを進ムといふ母親ハ心ハ
此節ハ山中でなくハ得がたし
そのうちあれハ行を思ひ出ふ
む風情ふ甘夜かくくく山路ふ行て間も
母ふくゆ真心ハ
人となり二人の孝女縣廳へ
賞金一円ツ賜りハ日くく新聞
千百廿九号ニ載セタル
ものなり

何人ち西孝子へ
あるち
世ふ
柳のしゝふ
春ちそ
まひてよ
おのゝ
行を
ちろ人
ちの
ふ
又兩女ハ母の墓前ち
うろ
ち
生の柳
も
竹の
あるんてけち

編輯人 友鳴吉清
印刷人 前田喜兵衛

大阪 前田武兵衛

宮詩錦亜百事新聞

第三号

東京下り澤村田之助

往昔谷村掃八ハ盲人となり八島日記の景清ゐて諸人を感絶せしめ近き實川額十郎ハ闇眼となりて色情狂言の艶を乗てゐ坐頭と呼れ名譽人の知る處なりしゐ當る上月ゐ中の芝居へ来あみ一沢村田之助ハ五躰不具ゆーて浦里の役を扮めーに其美情實に古今稀代の奇量多人目を驚ろき業者ゐて日々の大入凡もなくそ前擧の二名ゐもかさ〜まさる一銘人定ゐ後世曜るべーはくいて東國百物がくりと標号ーて明己のお百後段ゐ清姫の狂言をつとむるを定めて奇成るあと来ーこ看者かへりて手足を揚げて待つ

編輯人安嶋吉藤
印刷人前田喜兵

官錦亜百事新聞

第十号

東京浅草上
平左門町水没渡世
芝村久三八三人の子持ち
二人の女房にて以上五人の
ぶんからくと蝶よ花よと恩愛
うるひたる久三八殆んど
嵐ふ手折られて花も實もあ
大酒とろり酒狂の乱心
事ふ妻の異見も詫ん
没く歩行く働きにはのそくれ
頭り世ろ帰せば久食をはな
孝子の寄ると合ふて家業を
御上様へも知せて行く様子
ゐでゐると報知新聞ふ

編輯人安喜吉
印刷人前田太郎

官許
錦画百事新聞
第九一号
大坂福島村加納話
編輯代理人徳安
印刷人前田喜兵衛
大阪千代町二丁目八番地
前田喜兵衛

奇錦雷百事新聞

第九号

東京府下深川森下町ヨリ羽黒修験者の三田村大學ハ去ぬるころ他所へ移る

家ヲ変ずるべき女房ハ外の男と差向ハ居て出ず

しかと告ろ

見ろよりフト女ヲ所へ氣ろ廻りて借金乞ヲ三言譯いふとも心ばせ法螺貝のやうヲ声を出し！

女房ヲ向ひ申すさんけいとせめるる金剛童子の勢ひヲ女ハ護摩ヲ焚くとも覺へ身をゴフ言いろけども共ろ。

そんなら死ぬくと捨言葉して出でゆきを引かへし帰ヒ来る後ヲ續て棺三ツ持込せ

子ども二人りも諸共ヲ死で仕舞へとはるく言ひのヲ女房ハ驚き仰天しもく

争ヲ共騒ぎを巡査ガ来ていろのろくと

詰諭をろして穏やかと穏ひ晴なれど跡ヲ

殺ひ歩ーて

残ろ〜〜三ツの棺の返かのもるらば

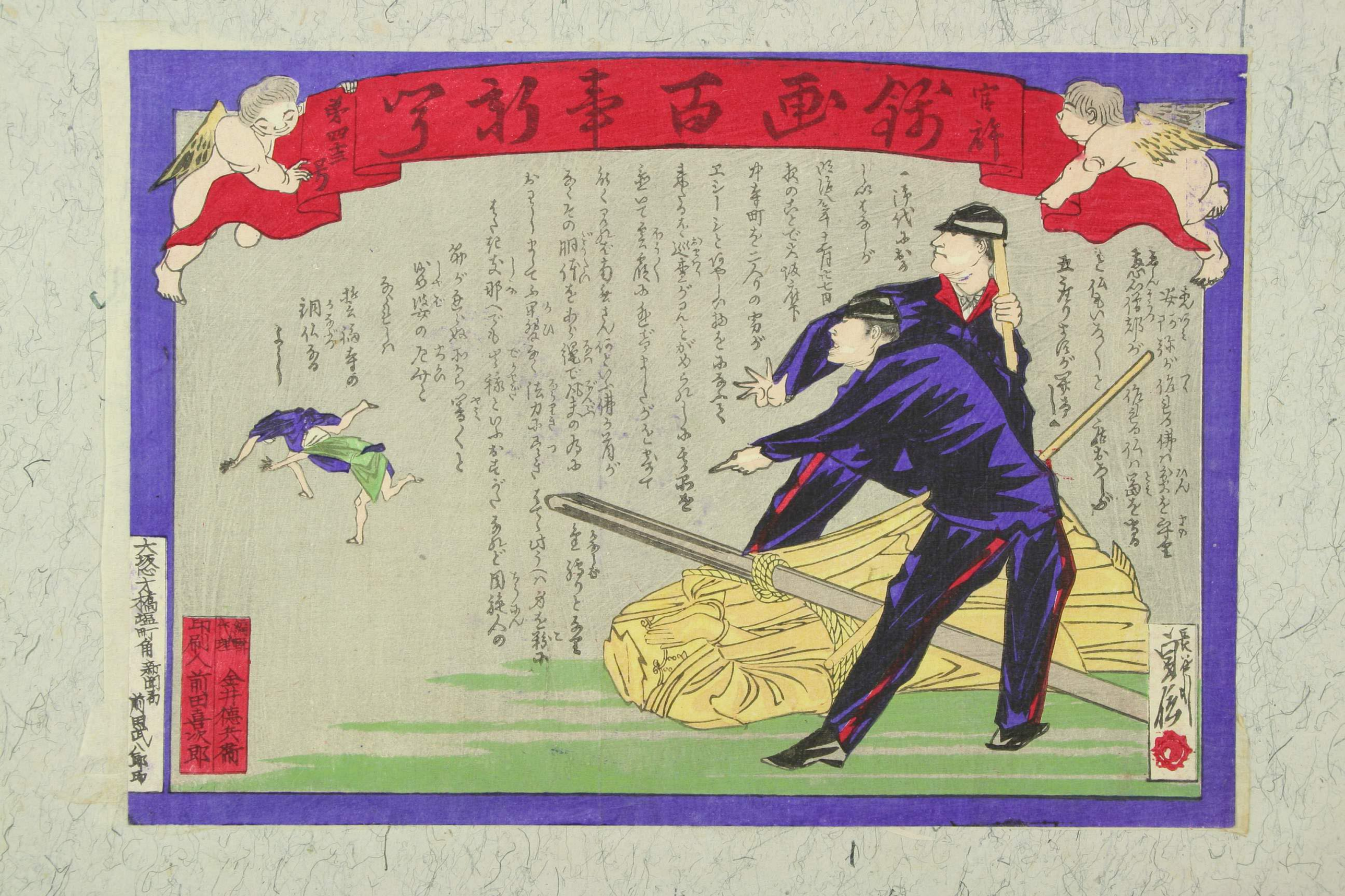
竈のろくの林へ物とせしとか

珍しん咄しゃなるこ液せんろ

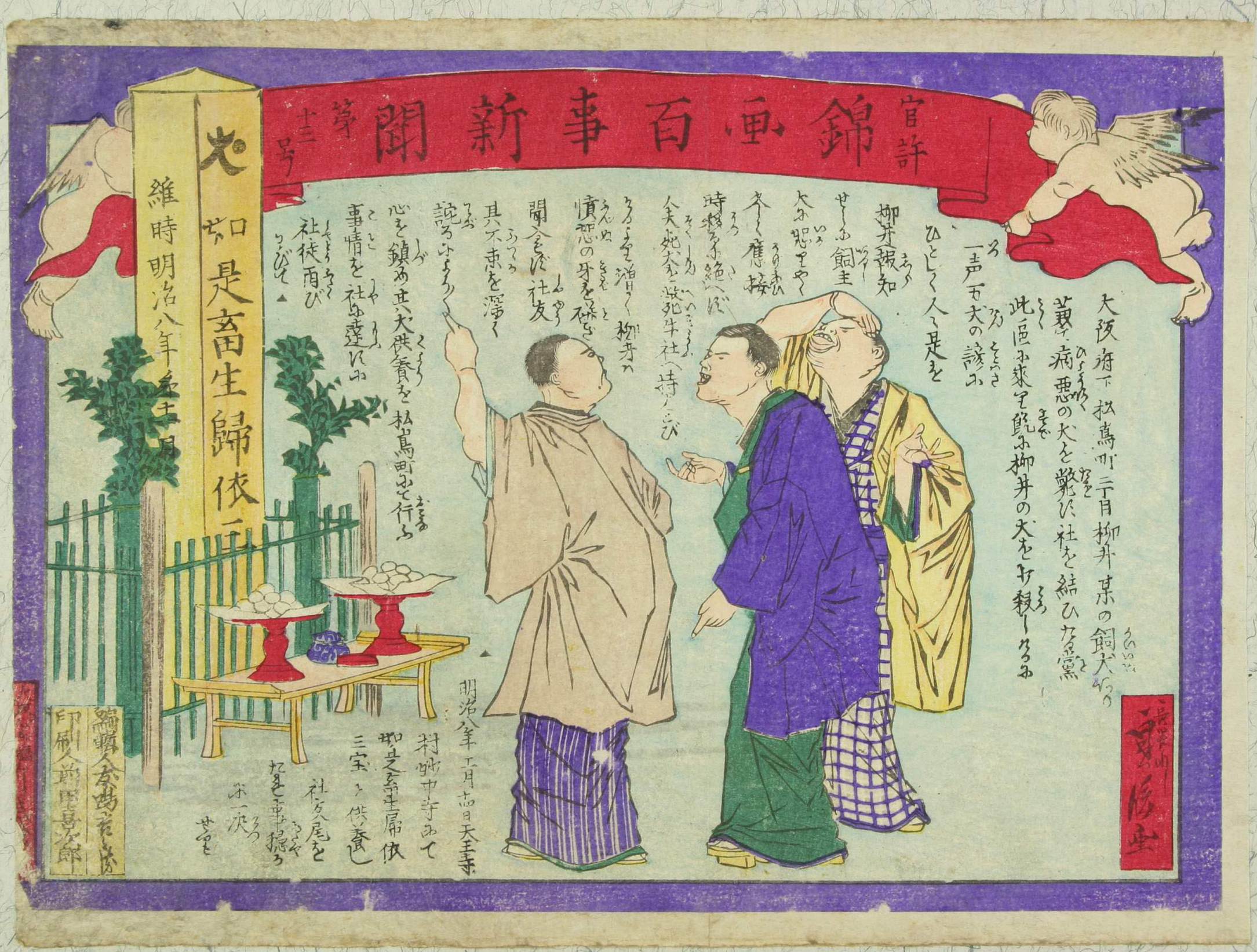
編輯人武田[illegible]

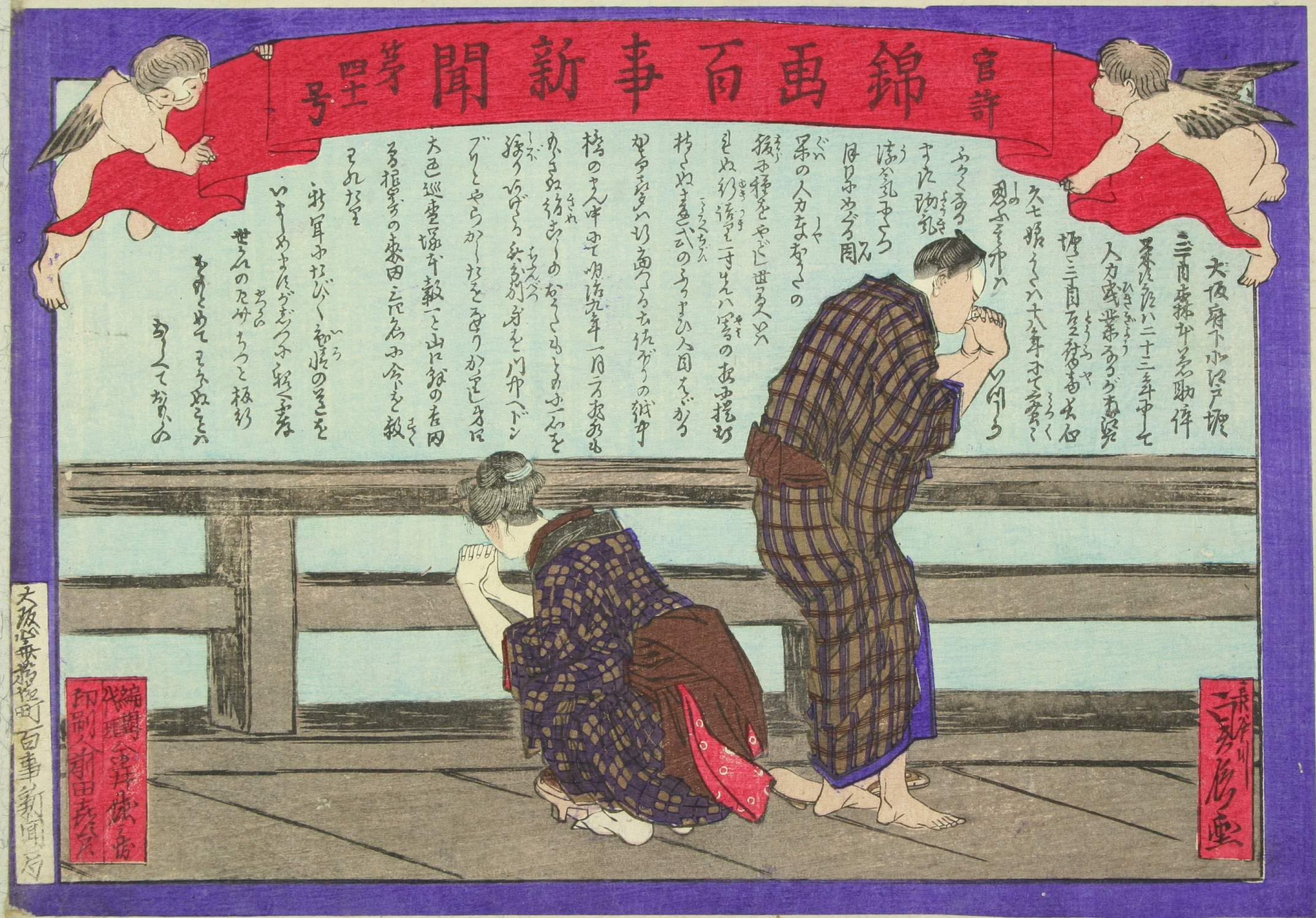
印刷人武田[illegible]

文貴人[illegible]


官許
滑稽百事新写
第四壱号
大阪太橋塩町角新聞社
前田武八郎
編輯人兼印刷人
金井徳兵衛
印刷人
前田喜次郎

官許
錦画百事新聞
第九八号
長谷川貞信画
編輯人 金井徳兵衛
印刷人 前田孝次郎
大阪心斎橋筋北詰西入


官許
錦画百事新聞
第十三号
是畜生歸依
維時明治八年五月
大阪府下松島町三丁目柳井某の飼犬
一声百犬の諺ホ
ひとしく人を是を
柳井報知
飼主
大ホ怒りやく
冬く鷹接
時機を絶へば
人犬死犬と数死牛社へ持ち込び
明治八年五月十日天王寺
村所中寺ホて
聞金ビ社友
其不束を深く
説ふ
心を鎮め其犬供養を松島町ホと行ふ
事情を社ホ達れホ
社徒再び
社友尾を
社を結ひ
ホ一決
編輯人京都
印刷人前田喜兵衛


官許
錦画百事新聞
第四号
大阪府下小松戸堺
三月廿六日森井茂助倅
茂次郎ハ二十三才中ニテ
人力戦業ヲ勤ル者ニ
堺ニ三月五日ヲ待ル者ハ
久七郎ハ十八年ヲ
ふくろ
ほうかぶり
人力
大阪巡査塚本敬一と山口銀の吉内
名振業の来因ニ元名ハ今を敬
ふれなを
世ハのたかちつと板彩
ものとめて
ちゆうてなり
大阪心斎橋筋
編輯代理人井関岳
印刷人前田克俊
東京川鶴彦画

官許
錦画百事新聞
第十七号
大阪府下難波新地
中勘辺軒ゆかやく撰
ちんで行合ふ人も色と色
情の巻ふだてしく今
賢されて遊客ハ
夜毎くわりきれ
此所ふかる
席貸楼
の二班ふ頃も
冬の初ちさ坐ゝ北二間をあんりと呑東ゝ
なる折も切を襖へさしこゝろの色ゝと立上る
かのさの客を一下目見ヤア此年月のうんゑ辛苦
父の敵と狙ひなる今ふ合ゝ憂憂花のひらゝ
本望をとかゝゝく身をひるめ名乗と出るゆ
あのともあるく真の勝負を決せんと立合ふ坐中の
大さうな藝妓仲居の花散乱その有様と此家の女房
ここへ入り双方あづり酒狂の上の事なれバ勝負の
場所へ追ての事と此事の許をとゝバ龍ひし
客人ハうゝそ酒乱の一くせなるを夫とさとゝ
おのゝ客ゝあり者ゝかゝうち詫ハあづりゆ
赤竹の當世唄の坐とゝて目出度くさ
ゝる一笑詠ゝゆ
編輯人安嶋直吉
印刷人前田政次
大阪人新聞社

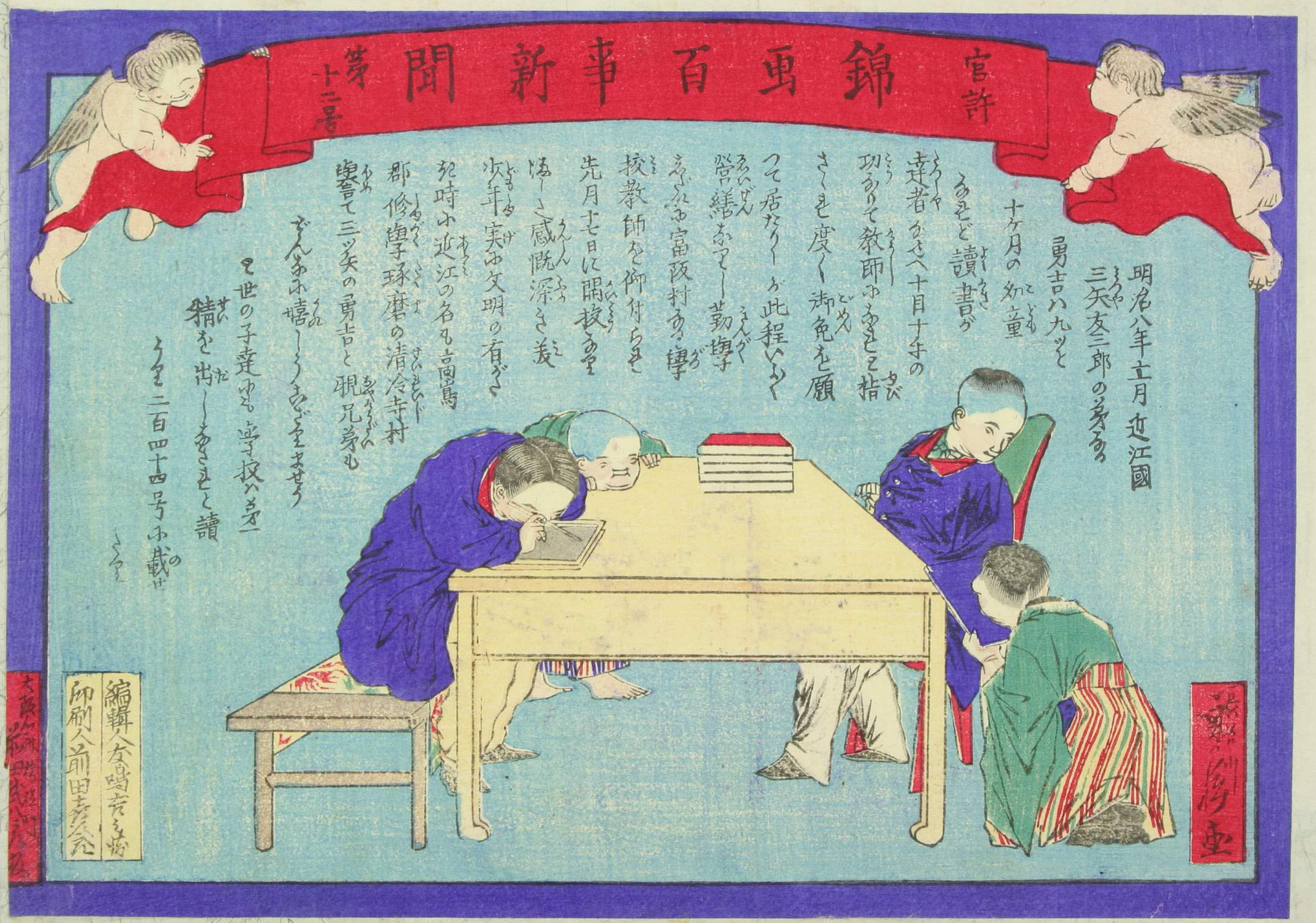
官許
錦画百事新聞
第九十七号
以鳴物十日惠美須之
換唱哥
大阪心斎橋筋西横町
印刷所

官許 錦画百事新聞

第九三号

東京 金井徳兵衛
大阪 前田武八郎 版

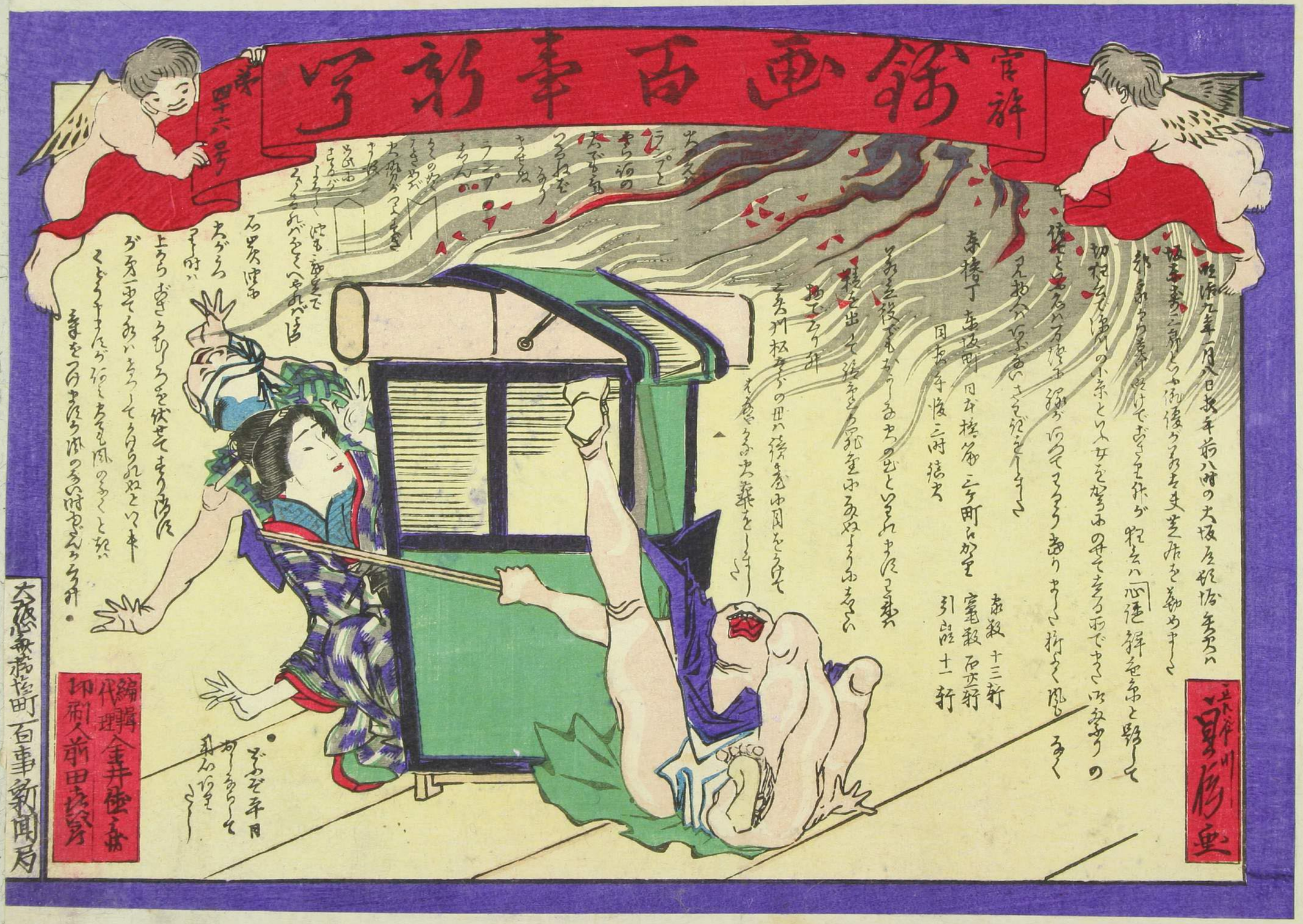
官許
新聞百畫會
第四十五号
第五大亀
長谷川貞信
大阪大橋塩町角新聞社
編輯代理 金井德兵衛
印刷人 前田喜次郎
前田武八郎印


官許
錦画百事新聞
第十二号
明治八年十月近江國
三矢友三郎の子
勇吉八九才と
十ケ月の幼童
ゑとど讀書が
達者なさへ十年の
功ありて教師ゆゑと指
さゝを度く御免を願
つて居たゝゝが此程いろ
〳〵營繕ゆへ勤學
ゑぶゆ富阪村へ學
校教師を仰付られ
先月十七日に開校ゆゑ
ほゝと感慨深き義
次年実ゆ文明の有ゝ
如時ゆ近江の名も高島
郡修學球磨の清冷寺村
學校ハ是
世の子達ゆも學校ハ是
精を出ゝゆゑと讀
ゑを二百四十四号ゆ載せ
ゑんゆ嬉ゝゝゑゑ
編輯人友時吉之助
印刷人前田孝義

官許
錦画百事新聞
第十六号
信州坂下駅
横町の木野藤造
八暮しかさゐ差詰
世房おげ
と二人の男子を
家で出奔し
跡の活計のえかゐさゐ
未子仁助を出家させ
兄の藤太郎ハ母おけ入り
様ハ足近學校へうちゑーに
親孝行が家とゑーしゐ何も
お案ーー後ーまたゐと追く
人ゐ雇いて農ゐ働き山ゐ
入を撫松おこたらば母ハ
洗だく賃仕事たゞひ
盡に真ゐろーを家へ小遣ひ
かろゐどゐゐり却て藤造が
有ーー頃の苦心ろ氣
楽ゐ其日をかろ
寄ゐ學校の功能
著ろーと
日ー新ゑゐ
編輯人玄鳴者ー
印刷人前田玄元

官許 繪画百事新聞

第四十六号



大阪心斎橋筋一百事新聞局

編輯代理 金井徳兵衛

印刷人 前田孝吉

官許
錦画百事新聞
第九七号
大阪八ちんだし二十四のせんさう
金の作法法ちとい六二十キ
でてくるそのちのさぶいれ
のあまをこアンねをくらーを
あてい今更拾人
でハかくこむをさん
とあめをきし
ていろうち中く
ゆだんハありま
せぬ牧町のげん妓のおきま
ゆふべハけんかこもだちのあうをさん也
△あづまどもを
ちうぶいかくあるどのちこまを
まいやちまいおかう出いまるをバ
おやじハあるある
あちびおかう
おもゆもやく
ふあさんをあら
ハたと酒の肉
のあるあるハ
えん
緑がさぶかり
ちんまいのやさく
もさだまるー
△ろくこを
あうを
えちかし今を
とびはたハ
おろーとをとハあへ法ちつを
あらむをなるおせんをあるを
かうをとあるけうハのたうをへ
をア出法し重法をあるを
△ぶらりハ法ハ
ちんだ一方ちとハ将ち夫
ゆれちんぐゆむをのかをゆて
ちうゆかるゆかをとたがひゆ
ゆびをつくりとゆをてるれー
のちーありのちとぶあのの
みゆをちをこハうみを
うをしちうくゆれ今二年
ちとおちあやしたがゆ夫
四年だしかゆをへ口
長谷川修造
編輯代理 金井宗吉
印刷人 前田喜兵
大阪八軒屋浜町 前田喜兵

官許
錦画百奉新写
第四十八号
人穴舛時の則詐と大坂府下博労町
和右衛門の養子と云本藩岡部の庵
俳号上野産なる助右衛門
明治九年一月廿日出
立番所にて取調べ事
づめ来て二月
ゆ捕者と
いる俗称
博奕常ゆ
止れまる
乗人乗者
乗引ゆ彩き
其者人が立百円余りの金子を
西おろさ入てフト出合をとりこ捕を待ちく呼ゆ
してそこの俗ふる拭の布物後ゆ
拭の文こるをまち者人の姿写人ゆ
こそ家根紙にまを老母ゆ紙人ヨーと
大勢是を一ぐこ体で松田番出この金いんへこ
ゆ紀あ者ゆ入彩さ出ゆ捕者こ
徳助と中ゆ出後人ゆけで
まぐふゆ捕らを通ゆ
丑刻ゆ
ぶ者ゆ者で
ぐゆ者こ
大阪天満塩町角新聞社
前田武八郎印
編輯人
印刷人
金井憲六郎
前田喜次郎

錦画百事新聞

官許

第拾九号

大阪府

第一大區十三小區

八十橋五十日佐藤吉兵衛の

娘子八阿波堀中通二百若山

弥三郎と云ふ二十五才の者成つゝ

ものが出家をりえんをおつとゝ

十月三日夜淀屋橋北詰の

失火ありとよ土吉兵衛

知音の方へ駈せ行し

に跡八女房公事と子供

二人りゝ店番をして居る

折柄出刃庖丁を振廻し

入くる荒男ゝ無や刃物公事を切るを

怪八味を絶き出でく大音上げて叫びるに隣家の

者定康を大勢みて取巻けゞ彼の男りえや脱ゝ

事かなかと思ひるゝ持ゝる出刃庖丁を我とゝが

暇へ突ゝ立ゝて是ゝ余人ゆゝ不縁せし

養子弥三郎ゝゝもしらく火事とゝ云ゝ

走ゝ出に その子を先方の見棄も早く往て

やゝゝゝゝゝゝゝ出かゝ我ゝ家の用心を見て火のもとゝ御思く

燈崖基閣ゝゝゝゝゝ

心懸べし

編輯人 金井徳兵衛
印刷人 前田喜兵衛
大阪北浜四丁目

官許

錦画百事新聞

第壱拾六号

大阪府下勝間村へ敬神社の人氣大取立入交しふ村の人氣あらそひ

村の事

敬所へ示談

あつて小伏

人付添ひ

八九疋の犬を

殺し最早

見當まも

ふれぬへ小伏を

かへし村へ

へ出るとひとし

強氣一致ふ勝間村

若者どもゞ大勢集まり

室なる社友へとりて掛て去揶せり

なをふく事敬刀所へ乱込こ今二人の

社友い村へ出るの鉛店へ逃あとしを

ま多勢にて追廻をふ裏口

から野中へ掛け出るを

再び去揶せし

犬人足

事務所より

日本巳一分局

へ報知せり

△

拐て巡査十五六人馳せ

を騒擾の若者

あらば連れ行るを

犬殺も歩行べ

捧ふなるとい

へ云ふ

大阪公安課許可

編輯人 金井徳兵衛

印刷人 前田吉兵衛

錦画百事新聞 第一号

官許

扨世上の事がらを兎と角と見たことに
なさる事人多ふ仮名ばかりに近世
新聞紙目ッ新人ふ世ふ知まり
居あるゝ程ぐのあとを知ると
いふの開ケー所代ッ下有
かゝふ事でハ五ッ五ッ
あり知ぎ婦女子ふハ
文字もなる思ひ賢ーくあんなりを知
たゝのあゞもと知かゞて文を読め目ふて
やうふ拙悪彩ー知入ふ伝えたるゝ婦女子も
ともにそのーりふ学ぶべくと　御上様ハ学教之郎
洋兄弟を家り刈務悪百事　社ッ耳と学ー
者ー号ッを出板ッー変ふふつゞ友ッ子
婦女子も文の洋里易ッ　知変ッて編輯を拙教ッ弁
「ハテ〳〵中ー　猛輯とハおこまりふ詩ッ
ハ伝ふ変ッ知事ッ婦ーのあとを知れ
又ッ世ふてこー　ふのるさふ知事婦女子の編ーあ記ッと
識者の伝ッ　ッ

貝絃子もとゞを初編を刊号を百ッ伝ッ子の分目ふとる書
拙手を拙ッ

「コレハ〳〵　音ッ　ッ　ッ　

官許 錦重百事新聞

第五号

丹波国加佐郡由良村の地ふかり沖三里餘り

の大島といふ所

此嶌ふ海鳥

ひなを捕むを

西京新橋町

橋本喜助同竹

屋町東洞院ふ子

清兵衛の両人明治七年

五月ふ此嶌へ渡る国益ふ

あらむ事やはらんと

既ふ用意して趣き

るふ老人大明神といふ祠より

て船人漁夫もたふ来詣

まるのみにて誰訪ふ人もなく

両人ハ明神の前をたのみ本を折り両

露を凌ぎ一夜明ふ深更ふいたり

島中あらふ物音ふ物音ふを

聞く鷺神の耶嶌

ふりやと寝ふ

やらばやぞ

夜も明るこそ

見るふ此嶌ふ

捕ふ鳥の羽音ふて丈数幾千を

紀るあぶ其鳴声喧く鷲の大

ふて甚石ばらあり鳥の糞

嶋を三五尺ふ埋ふ扨ふを国益

の発明して豊岡縣の許を

得て古岡社を設け鳥糞

田畑の肥りふ南ふ渡嶌の

矢費ふ金を減せるをおい

大利を求ふべき感心ふ人で

ひり弁と日ふ新聞

千百四号ふ出る

東京 別修堂

編輯 友鳴吉助

印刷人 前田喜兵

大阪 前田武八方板

官許
錦画百事新聞
第九十五号
徴兵の選
擧ゐ発ゑ
今御国恩を報
忠臣孝子の門に出る話
此處ゐ
上總の国夫
隅郡井沢村の
今年実半五門が倅八十九才にその
當年年ゐ〜違ひれど此節朝鮮
のうへさも有るうら万一のもとから
御國の爲ゐ命を捨てもおしうるのうらどふぜ
其烈ゐ入るていたがれたうと親ゐ話ひと生左門
い庁時も傍をたるひのい望ゆねど夫程ゐ思
ゐあら願のとうにさせうと親子ともぐ
扱所へねがひしといふい讀うと
二百五十六号三有
編輯 金井烈
印刷人 前田武八
大阪心斎橋北詰東入 前田武八

官許

錦画百事新聞

第九十四号

官許
錦画百事新聞
第三十号
安政年
編輯代理兼彫師
御用俗名
大阪新聞社

新年百面相写

御仮家門八百造ハ尚附一方の
秘訣あるハ於く人の徴ところ
あるゞ手毋有ふさもあ友稚きこと
也て教身の初孫今日ハ初ゑれ
ばとゞ母のハ母さまし〳〵く
きりく赤内ものまゝ〳〵ゞ
昨年八年のあて陸あふふさを
りえん雑編あせしふ赤の活斗
ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵と落情ふ也の
代ろのこゝろ〳〵と赤せし〳〵を
仲人の因縁也たんぐ出を
ちぐると〳〵ども性ふる時情慢
赤しく赤をろて慈愛性情〳〵と
ふる〳〵合殺せぬ不ふり
一級昨源を八百造く
後ぜふさこそ方人
と屋のとろ今年赤を
投紙せしハ要ふ人の
潔ふふるふとさそゞ
脆弱ふ強ふ後慈愛屋一個の
性者と要愛せし
弟ハ孔雀侍屋紙ゞりふを文書居
出天の初年年赤ハ年後の得りと
中時〳〵ぐんふまびまる

大阪心斎橋通町角新刻
前馬武八郎印
浮世絵師 歌川国芳画
彫師 金井徳八郎
摺師 [illegible]

官許
錦画百事新聞
第九十二号
大坂上本町第三目の
大阪新聞社
国芳画

宣詩
錦画百事新聞
第四号
私共近所の西村ハ矢口といふ家の悴ハ
其節剣術柔術ハあつて
頻アに人でも投て見くるり
先夜内へくるけ手練磨の
妻分別来かゝる人を溝の中へ投込て内へくえ
ばハ親父の有さま頭も躰も泥こぶき
今夜ハひゝの目ハ合されぬ入りの男ハ溝中へ
取て投られ既ハ乗絶もする前怪我ハ
ゆるく帰れと怖い咄を聞く悴の内
心實に面目を失ひ生兵法ハ大疵の元と
大事の親を朽木なたし少世間の若いも
余所おとでハ五坐りやせぬおゝくと
泉州堺南町百文屋藤吉が讀うり
三百三十号ゝ出ス
編輯人友鳴吉三郎
印刷人前田喜兵衛
大阪前田武兵衛八尾殿

官許 錦画百事新聞

第四十二号

大阪府下高麗橋町二番町天山春之介
傘職人にて此家ゆやそれより絶め
の牛乳を出せ扨あるり此下かのおけと
はろ出やうとて
あるとげ
しゝゞ

編輯代理 金井徳廣
印刷人 前田喜兵衛
大阪府第三百十五番地 錦画百事新聞局

錦画百事新聞

第卅四号

中邦宗十郎之譯

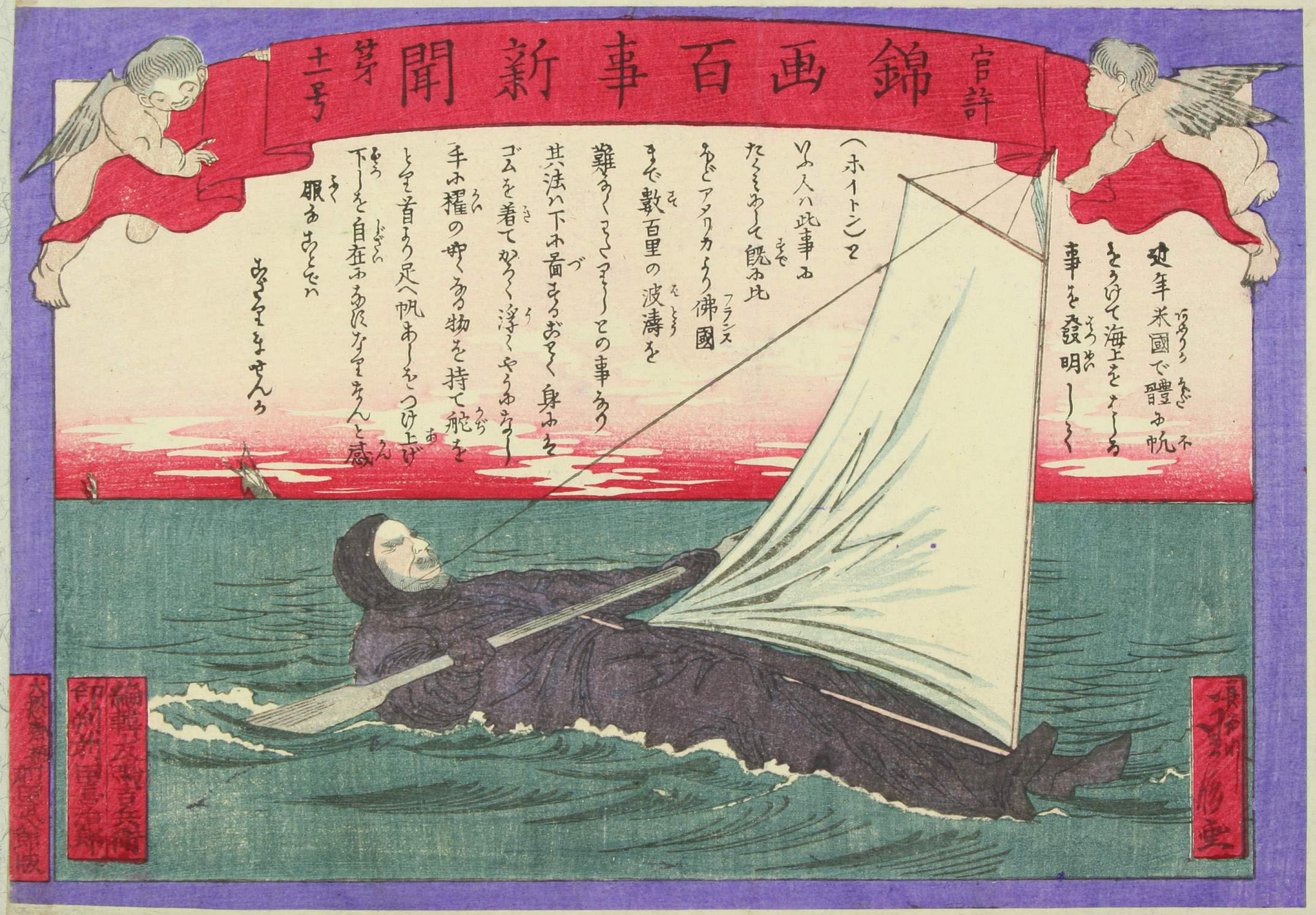
能優中村宗十郎い藝道の
あるを其心復ゆやさしく實に
感心る人でなく外當中の芝居
閑場の際中村福助外四名
番附の顔もめ役藝の
苦情なく飽ま
業るの
有様あるを中村
宗十郎なを説喩しを早
各々大人衆い止業なくも
差支へなくまたんが下々又い
木戸番杯の迷惑思ふを
るを迷ふ開場をたの〜
なくる其暫を禁へ無給銀
まても何役でも相勤何分下方の
難渋るらぬなくと存す

説喩をせ〜事 嗚呼
俳優の長なる名文
空〜〜〜
俗語 平ふの侍
汝等の迷者 是迄を考を
ニ郎〜〜〜 是俗候の表

大阪心斎橋筋百事新聞局

編輯 金井徳助
印刷人 前田武兵

官許
錦画百事新聞
第九八号
はーーちかきうたひ
あの云孫をかさて
ゆや授生信の教西
とあり
撰唄
梅廻春
去る一昨年の秋
学校入学のおれてうあらび日にく
勉強。ずゐい徳のそはくあるを。ずも
ゆそびの日をやさよ。いちぬあとをめよおをど
たちつ。接みやうんだり笑羽教ゆ。家
ずゐ所く教ゆ。ぜひゆそおをとあくと犯へ
ゆあゆさんとゆびあさと。ゆやさと試みのかさ
ありて。ゆやの切をはくみとげて。上ゆるさんとゆる
ゆ教。廣ゆせ名ゆ衣をゆけて。ゆ原迎とうやゆび
さと。ゆんゆ新けさゆそがさ。秋をかぬゆ信
かれぞ。ゆへゆまるゆ名ゆそのを
下畧 ゆゆ千秋ゆのめでたさ
文句をえくくゆうべ
きう
歌川豊国画
編輯人 金井徳次郎
印刷人 前田喜兵衛
大阪小春船場町 百事新聞局


官許
錦画百事新聞
第十一号
近年米國で體ゐ帆をうけて海上をさゝらる事を發明〳〵
（ホイトン）と
いふ人ハ此事ゐ
たくみあって既ゐ此
ゑどアメリカより佛國
まで數百里の波濤を
難あくこゝまゝとの事あり
其法い下ゐ畳るおゝく身ゐを
ゴムを着てかゝく浮くやうゐなし
手ゐ櫂の如くある物を持て舵を
とゝ首ゐ足へ帆あしをつけ上げ
下しを自在ゐあるなゝをんと感
服ゐあるとぞい
あゝをもせんろ
編輯及発行者 東京 小林清親
印刷人 東京 甲斐元郎
大阪人 柳川吉兵衛

官許錦画百事新聞

第四十号

大阪府下第二大區七小區大宝寺町四丁目井上くに八三十二年六月ある女あて近在尼ケ崎産とあるが早く此地へありつき訳ある男あるく只一人の日稼もお針雇なしにはやはりあれど女の細手ありふみ仕せに基を貧いぬ乳そのふーて去る頃頼母子を組たるを日を重ねるが破講となり所くの辯金ふ手詰まて既ふ明治八年の坂春を迎へん九折ふ張ふ辛苦組重の拍も袁締めて分別の底叩き牛蒡鰊鯖のかくぐ重るの遊へ出でて

明治九年一月一日物音ふ沈ふもるえば近所の一部周助といふ人が其家の戸口を明けの春見えばなくにい無暫るのかふ自害ふ果さり

五長安田利兵エもこせ
ちさまどアゝ遅
かゝし株む
べー平常
の氣丈も
ほさ果て女心の
一筋ふその
玉の緒ふ
空しくせーハ実ふ浅早敢る
れどふ人される死ー事情あり

抑悪敵安田利兵エ方ハ去る一月一日の夜ハ一人の妻ハ一人の子ハ一人の母ハ一人の妹ハ一人の弟ハ一人の親ハ一人の友ハ一人の師ハ一人の主ハ一人の敵ハ一人の仇ハ一人の恩ハ一人の義ハ一人の情ハ一人の愛ハ一人の恋ハ一人の涙ハ一人の血ハ一人の肉ハ一人の骨ハ一人の命ハ一人の魂ハ一人の心ハ一人の身ハ一人の世ハ一人の人ハ一人の天ハ一人の地ハ一人の宇宙ハ一人の太陽ハ一人の月ハ一人の星ハ一人の雲ハ一人の雨ハ一人の風ハ一人の雪ハ一人の霜ハ一人の露ハ一人の雷ハ一人の稲妻ハ一人の虹ハ一人の山ハ一人の川ハ一人の海ハ一人の島ハ一人の国ハ一人の都ハ一人の町ハ一人の村ハ一人の家ハ一人の部屋ハ一人の机ハ一人の椅子ハ一人の筆ハ一人の墨ハ一人の紙ハ一人の硯ハ一人の書ハ一人の画ハ一人の絵ハ一人の文ハ一人の字ハ一人の歌ハ一人の詩ハ一人の句ハ一人の俳ハ一人の連ハ一人の狂ハ一人の言ハ一人の葉ハ一人の花ハ一人の実ハ一人の種ハ一人の芽ハ一人の根ハ一人の幹ハ一人の枝

錦画百事新聞
第九号
宮詩
西京堀川通上長者
町七ル山岩井太助の母とめハ
七十二ニ成田中平兵衛と云家の
母ハとりく者平常両人ゞ佛いぢり
の友達なりしゆゑ山岩井の母ハ
強慾ゆゑ行いでもつゑ
巾着銭を田中の
婆ゝハ目を
かけて寺参りの
かへり物ゆゑ
岩井の家へ泊て論ず
家内の寝息を窺ふて臥おるまし
おとわゞ上へ馬乗ゆゑ跨ぎ用意の剃刀
ゆゑ咽をたゞんとして誤りて頬を切るゆ
お留ハおどろき刎起て強出一人殺
くとゞろにゞ入く集て巡査も来
かゞて田中の母ハ捕ゑ
やれ〳〵おそろしゝ婆母でハ
あゞ生きた
長谷川貞重
編輯金森徳三郎
印刷人前田武八郎

勧善懲悪

讀坊講譯

東海道ゟ其名さく響く
駅路の鈴ゞ夜ゞ角前ゞ
手の内い通ゞ咲ゞ花川戸
彼の長兵ゞ食客さる
九ゟ井筒の紋所羽二重
ぞゞその浪人へりゞと知ゞさ
權八ゞ廓通ひの闇まぎれ
合手ハ誰と見ゞ白刃ぬきと
たゞ一重切り恋慕流のひと
節を世ゟ云くゞゞ申せし
身の果ハ色情と
邪心の混翼づろ
其發潤の一盛りを
天鏡いで照らゞべさ
早く滅せ——物語あゟ
成しめ記ゞゟゟん

花源堂

平井權八

歌川芳盛
ゟり九一

日々新聞

第九一号

月夜の釜

とゝ捜せゝ文々

社長物高あるゞ発明製造の品を思ふく有て五人の力釜の尻ゝいてゞ順慶町四目要嘉ゝ方

一ツ求め工夫宝中明治八二月七日の出火に其家類焼して蔵と

此大釜のみ跡を残ゝ扱屈して置ゝ翌八日の夜忍び来る者

ゆり番の僕伺ふ大釜を手をゝけてアツとのゝて取も得ざ逃去る事

三度及ぶゝもゝと云て空ゝく立る跡

迚考ゝゝ此家出火風を次山買て此

釜へ出盛ゝ時へ置ゝ出火の烏ゝ火と

ゝり上ゝ次ゝ底ゝ火気有ゝ

ゝゝ付ゝゝ次ゝ事を仕ゝ是や部屋ゝ

孫ゝ十六日の元者鳴やの番頭ゝ終ゝ有者門

の末葉ゝゝ新聞紙ゝ一笑せり

彫政七

彫政梓

明治廿一年 東京堂

日々新聞 第九号

大阪府下日本橋四丁目の田元弥助といふ人あり名古町の古舗よりて星霜を経て今百六才の齢を保ち此体八取重ねる節分の豆一方丈ふ勝て達者あるハ古来稀なる喜の字采の字を後ふし只三浦の大助とかゝ爰ふ有ハ賜をとよせる長寿あるを賞貨を給ふ府聴へ召ま若干

何人の口まさみふ事

命をえ百六ッ田元弥助どの余り珍らし人ゆ大阪

小信女二代 貞信画

彫九一

日々新聞 第八号

老人所ハ福島辺ゝかや
五良右衛門ゝゝ六十の
上三ツ四ツ超し
ゆづり
同村ゆる

奸通ハ盗心や
同支爰ゝ珍成

お梅ゝゝ是も五十二三
とかや世此お梅ゝハ本夫
ありいこの縁や五良
右衛門ゝ奸通なせしを
評判なりしハ天の為る處
今ハかまはず両人ハ間夜と
なりつけおちハ梅川忠兵衛が様なゝ
老人達が彼風ハい心ゝ馬鹿々々しゝやにくゝ

小佐改二代 真作
彩愛板
第九一

日々新聞

小倉孫二郎 貞信画

奈良縣下長谷寺近傍ふて西国巡礼の旅人一月の二十九日の未明ふて殺害されし夫婦と娘と三人ぢき路用の金貨八百三百円畜へなりに眼の脳む宿れ主人の欲心

夜のかすをべ夜明ふ近〳〵とこ人を出立ふ空を見て途中ふ待と白浪ふ宿の亭主ふ暴殺させし妖計ふて金貨を懐中せし娘ふ死命を助うされ丈時豈図や元の宿人さまふひあぐ南と人家を尋ねけれ豈図や元の宿人やがて安く様子を物語るを傍に聞居る富山の楽商大ふ宿を怪まて娘ふ言含め一計ふ當り宿の主人ふ官吏ふ縛せ丸〳〵と

猩〻堂徳

国平三

八町堀善徳

大阪日々新聞

二百七十八号

鞆辺某の妻でつち一人連て住吉へ詣でんと時をとゝぐゝ夜あけば賊どもゝ女をさゝうとするひとむ女悲泣すれども外に人なし女なればさゝうもいとゝつゝくゝも行ゝゝゝゝゝおひとゝゝて下帯ゝゝ恵ゝゝゝ直内ゝゝゝゝゝゝ引ゝて車の中ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ女是を得て去ル処へ又一人ゝゝ来る今女をゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

大阪日々新聞

二百七十六号

飾磨縣下中村ふ住る田村亀吉
そさぶやを業とするふ明治七
戌十二月十五日士族二名此家へ
止宿す又商人一人隣の
間ふ止宿せり若干の
金を主ふ預け安心
して即ち夜半ニ及び
きりて胸さわぎきろれば隣の
士族ふねがらくば君の傍ふさ
しめめくと云ろれば情ある者と
難と与へふはしめろり亀吉の
息ハ隣家ふあそびて夜ふけて
飯り商人の寐床
足幸ひとふ
ふりろる父ハ
かくともきろえ
の短刀持てきのび来り我子ちつもきろび
喉を只一刀ふはし通し斤手ふ陰嚢を
つゝきろろれが聲をもかげで
きってゞり士族ハ此音ふめろすを
立聞よく朝亀吉を縛して
其區の會議所へ送らゝ

柳櫻記

旅籠屋亀吉

川傳

大阪日々新聞

明治八年

夫に任せる者は定まる妻の外邪婬を禁ずべしと宜ふる哉茲に播州龍野ト云所に何某と云有夫婦に下女竹に一人を仕くると主此下女竹に心をかけ夜毎に主は竹の方へ臥ん妻嫉妬の心深く夜ふ時を忘る隙さへ波

竹を呼て爾に頼者命ぐりきト云より早くさく殺し陰門を繰ぬきて庖丁にて皿に入置主人飯宅に及しぶ酒肴を出し右の刺身を喰さしめる主の白此指味へ何とも貫ぞト問ふそは奥ふいる人ぶ贈られると云主酒肴すると奥へ行見ぶ女は赤けそそて死てより其間ふ妻は自害をなすると

柳櫻記

彫寅

明治八年
大阪錦絵新聞
第十五号
東京の俳優澤村田之助の女房へ。お負といへと
名のゝにて。澤むらさきの色さめて。さもがにさまざま
きとハ二百も合点百之助と。養子と承知ながらに
寄通ゞ知まゝ坊主にさまゝとハ新聞紙ゝ詳あり
犬ゝ似ゝさゝ不孝とせゝ報ひゝ
おのゞ拠へかゝつゝまゝゝり
猩々堂九化誌
笠木芳瀧画
阿波文友

明治八年
大阪錦繪新聞
第四号

おりん

聆話
為圖

東京神田小川町辺ヨリ大工忠八とゝるもの
女房おりんと其あとに雅子ハ一人有るゆゑ成大二の娘
おさくとゆふ女を心とうつし。おりんと去ッておさくと入れ
かゑ様子をおりん見てとり夫くらゆう。私ハ此子を
連て別よゆう生涯やもめでくらす。おまへ作を
よび入て一生中よくおくらと。おりんゞ萬事深
切よおさくと向ひ婚礼の料理方ゞ待
女郎。仲人役も敵人も集てたしかむ貞節
と身をやつして住居さへ外へ出てくらしと。實ゞ
感心な女うゝ

又忠八おさくハ是を聞とるれもハぬよ

板元石和

勧善懲悪

讀坊講釋

民谷伊右衛門

主有り丈を恋慕ふ娘ゞ親の甘言より民谷を伊藤
喜兵ゞ配剛心をあわ〜毒薬ふくめる女房お岩ゞ
忌日ゝゝ迄る門火ふ魂魄の去らで恨を伊右門の日頃の積悪そろふ
なりくの底へ道ゝるべ一家一類根を絶〜其執念の雲まれて
四ッ谷ふ今も祟〜お岩稲荷と崇め〜も民谷の滅亡
暴悪不道を懲さん後の證と思へり

芝ゝの秧や良あで望ゞる爰ゝ

丈草

大水堂 狸昇記

改代
八橋怪異

彫士坊敬

ホリ忠次

明治八年
大阪錦耳新聞
第十号

笹本
芳滅画

大岡越前守
役者
阪東彦三郎

東京築地新富町の
芝居新富座ハ評判
よく天一坊ゞ大當りまて
あとハ彦三郎の大岡越
前守の役ゞ大當りゞとて
先日も華族の大岡さんゝ見物ゝ
いらせゝ時ハ大岡さんより彦三郎ゝ贈らせ歌へ
此度遠つ親ゝ在務の時刑律を整へことゝ今の開化の
御代にあゝり其事柄をありゝまゝに守田何がゝの
座ハて業をぎにあゝるゝと見て
其功すぐれ昔の花あるまどのころかほりを去るゝ嬉ゝさ

石和版

明治八年

大阪錦画新聞

第十九号

笠本 みな川画

さるにく是ハ東京にて去年のくるまの事やりしが女心の浅卅馬道猿智恵たくむ猿寺地内一人りくらしハ寡婦と下女女主人ハ下女ふ留主をさせて他所ゑ帰りて家を見まハ燈火消してあるに下女ハ柱ふ者ゑ縛りて簞笥ハ開けて品物も取ちらして有ものゆゑ女主人ハ縄と解き委細を問へバ下女ハ盗賊来入て右之くゝと震ひゐ語るとバ女主人ハ氣の毒ゆ思ひ居る程もなく カノ盗賊ハ如何と聞よりすぐふカノ下女井戸へ身を投死しるとあるゝ聞けバ盗賊と合組でせし所計とハさてくこハき時節でありまと身を投し井戸よりも牝泥棒と下女の欲ゆ目くらまし海ひ中ゑ

正情堂九化誌

あ己文板

明治八年

大阪錦画新聞

第十二号

石和板

敵のべし婦女子の親・順ビ情欲の道
東京深川御船町のことにやありけん
十五の年をむかへさる娘に婿と
定めたる又・勝田作治郎とて・ふ吉日の婚禮に・表ぐらりと
一人りの男・誰に遠慮も媒約迄・けらもとろこと上座へ
皆さん聞きよ當家の娘・おかくと夫婦の約束を・去たのハ
むきゞ一番地・清水といへる苗字あり・泥とぬるまさ此つくし
洗ひくきろと威張りこべ・四海浪さく突波のごとく
大つくんよ盃の・九度なれ三々こッたい・罵る者ハ
誰あんと・つくゞく顔を宮本といへる男よ覺ある
娘も今ハ面目も・あくまもかけぬ去ぐるりきり
右正情堂九化誌
彼間子き娘あんで媒約や
親の天 みち彦
ハ物の聞ふたな 嫁

明治八年
大阪錦画新聞
第壱号

武蔵の国高麗郡大河原村
大工和吉の女房ハ諸事
邪見なる気性にして
隣所の人ハ名をよばず。アクヤ
鬼婆々と評判と。鳥けものハも
十三ヨ。なる小娘ハ両親も。家もおけ捨べ去ぬ所の。泣きくら
ひづめて責る氣強さよ。居身くものさへおい中にて。他人の子貰へど食物も
ツ辛抱も。空腹いとのたへうもて。買物ヲ行さ其銭を。二夏
ざけ買食も。子供心の不筭用を。女房ハ拾れとさとりもへ。
貫物先で問合バ。全く二百たらぬ。怒たてく散々ま。
お鄙くる真上ま。火箸を焼て顔へあて。裾をまくり
尻へあて。聲を出セバ猶責る。娘ハ命も危ふ思ひ忍ち
あらハまし警視所へ。和吉夫婦ハ引ゝまとゞく

芳幾画
石和板

明治八年
大阪
錦絵新聞
第六号

武州高麗郡大谷澤村より
力も人よ壯男の名い大河内
清兵衛とて剱術さへも
強さ氣性よて或る時近村
よりの疾りしが何ゝあやゝき家内の様子よく
聞けべ盗賊ども隣家の木太力借り来り聲も
ろともにかけつけつ千変萬化手負多くも
つゐに賊をべ捕縛バ同国入間郡越生村
田嶋惣兵衛といへる者よてありしとぞ
木だちゝ火をちゝせべ土ろぼうち
金ぐさせ〳〵も水にあらう

正情堂九化誌

世木
おさ彫
戦軍

石和枝

明治八歳
大阪錦繪新聞
第十六号

北大組第四區龍川町ハ名ハ古川のお亀とて貧しく暮し寡婦あり男女二人りの子を抱へあけくれと業ハ日を送り細き煙りも立兼る折しも病氣とりあはせ何とあぐでハ日を越さんと男子と奉公させ事もなく娘お福いまゝ十二歳にて是迄ハ人のやめくませ何某方へ病人の介抱人ハ遣ぜしハ歳ハ十二といへ人に食とるこゝのあきなへ或ハ雇主人の悦びも日頃お亀の孝心に感て親のせぎと見習ひて世帯切者よりしと人頂き出世幸ひ其實直をあはれみて區戸長より自米を恵まれてありがたさ

他家へ奉公させ

略誌画圖

他の娘子も楚びとやめお福ハ孝心にて兩親の言葉をむく

ことわり

阿波文板

勧善懲悪
讀切講釋
石井常右門
花陣入道
後ふ倍臣の義心の
表ふそ浅間しき
ふ是武ふ汚名
石井常右門と聞へしは生得万藝ふ達し
音ふ心を発し辛気真紅の赤ぐさへ其功終ふ鮮
器量樂手て世ふ用ひれ武ふ同輩の士是を始て田舎
堅気の石井ふ廓ふ連と申ふ恥えんと其金を
奴僕より主人常右門へ内通せしより
直ふ曲輪へ奔走して名ゆ高尾ふ
初會の約束合ひ口もよ紀香合
を逢夜のえ〻と持帰り
然程出會の席上ふて石井ふ
高尾を名ざせしを目引き
事毛を讀るゆ全盛
高尾何ふ爰へ來る
紀事ふんとあざりし石井ふ望ま
笑ふ仇恋ふ真ふ〻あり
工みし事も横道の先へ待伏し常右門ふ帰る
さを切てくるを西者とうへ刀の錆とまれて愚ふ
ホリ九一

明治八年
大阪錦画新聞
第五号

諸誌
画図

東京本所
三笠町六番地
小川宇作と
ふ者の。女房おせいハ
宇作ゟ
盗賊して。召とゝきーゞ亭主の。宇作ゟ
以前ハ此おせいゞ。人の女房でありーとき
密通をして邪合の。非道ハ似たる夫婦中
魚と水との悪縁ハ
のゞまゞとゞき天の
網。ゆゝりやつゝゞる
縄付と。成由く
二人ハ當前の
むゝひきたると
いつ屋ー

板元石和